

学 位 論 文 要 旨

氏 名 和田 健作

題 目 子どもの身体的不器用さの評価尺度に関する研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本論文は第1章から第6章までで構成される。第1章では本研究の背景について、わが国では身体的不器用さに関する標準化されたアセスメント法が確立されておらず、そのことが身体的不器用児の正確な実態把握を困難にしている。また知的障害児者の困難さは認知や学習面の課題のみならず、身体的不器用さの問題がある。しかし現在国内の学校現場では、一般化された身体的不器用さの評価法は存在せず、その作成が求められる。そのため本研究の目的について、子どもの身体的不器用さをアセスメントするための評価尺度を検討し、幼児の身体的不器用さの実態を調査することを第1目的とし、知的障害児の身体的不器用さをアセスメントするために学校現場で観察しやすく、教員が簡易に評価できる身体的不器用さの評価尺度を開発し、知的障害児と身体的不器用さの実態を調査することを第2目的とした。

第2章では、既存のチェックリストを参考にした質問紙調査により、5歳児における身体的不器用児の存在率を把握し、身体的不器用さが生活動作や体育などの、どの場面に特徴的に表れるかの運動特性について調査することを目的とした。その結果、第2章で使用した幼児の身体的不器用さの評価尺度に尺度には高い信頼性があると考えられた。また調査の結果がDSM-5のDCDの存在率とほぼ同じ結果であったことから、本尺度の使用可能性が示唆された。また身体的不器用さのある幼児の運動特性が「バランス」「捕球」「書字」に顕著に表れる可能性が示唆された。

第3章では、知的障害児の身体的不器用さに関して因子構造を明らかにし、学校現場で観察しやすく、教員が簡易に評価できる尺度を開発することを目的とする。その結果、知的障害児の身体的不器用さに関する3因子計12項目が明らかになった。第1因子は「両手の協調」と命名した。第2因子は「視覚と手指の調節」と命名した。第3因子は「姿勢制御と身体感覚」と命名した。第3章で作成された質問紙による、3因子12項目は、普段の学校生活のさまざまな場面で観察しやすいため、項目を意識しなくても、教員が回答に際して児童生徒の普段の様子を振り返るだけで容易にチェックできる。このことにより、児童生徒の身体的不器用さの特性を、3因子の観点からアセスメントでき、それぞれの因子の特性に応じた系統的な指導

に活かせる可能性が考えられる。

第4章では、第3章で作成した知的障害児の身体的不器用さに関する評価尺度の信頼性と妥当性について検討することを目的とした。その結果、第3章において作成した知的障害児の身体的不器用さの評価尺度に高い信頼性があると考えられた。また、尺度の質問項目の尺度構成の内容的妥当性および因子的妥当性が示され、尺度に一定の構成概念妥当性があるといえる。このことから本尺度の使用可能性が示された。

第5章では、第3章で作成した知的障害児の身体的不器用さに関する評価尺度の素点から、身体的不器用さの程度を分かりやすくするために標準化の検討を行うことを目的とした。その結果、第3章に於いて作成した尺度を標準化し、CQ得点を分析することにより、各群の身体的不器用さの特徴と傾向が明らかになった。本研究で開発された知的障害児の身体的不器用さに関する評価尺度について、CCCID(Checklist for clumsiness of children with intellectual disabilities)と命名した。

第6章では総合考察を行い、本研究の第2章で使用した幼児の身体的不器用さの評価尺度の使用可能性が示された。また、第3章から第5章で開発した知的障害児の身体的不器用さの評価尺度は、主に学校現場での簡易なアセスメントを目的としており、アセスメントの結果により身体的不器用さの程度や支援度について把握できるものである。

今後は、本研究で作成した知的障害児用に開発したCCCIDのような、学校現場で簡易にアセスメントできるものを、幼稚園や小学校などの通常学校でも開発する必要があると考えられる。また評価尺度を実際の指導に結び付けるための、具体的な指導事例の検討も必要であると考えられる。

また尺度の信頼性および妥当性をさらに高めるためには、他の協調運動検査の尺度等との基準関連性を検討する必要がある。しかし我が国では協調運動検査の尺度は少なく、標準化されていない海外の協調運動検査も多いため、今後の検討課題である。

近年我が国の特別支援教育でも、子ども達の身体的不器用さが注目されつつある。身体的不器用さの原因や二次障害、指導支援の観点として、認知や心理面が大きく影響することが本研究で示唆された。しかし幼児や、身体障害のない知的障害児の中でも特に支援を要する場合、認知や心理面が注目されがちであり、その原因であるかもしれない身体的不器用さは見過ごされがちであった。そのため本研究で試みた評価尺度の使用や作成により、見過ごされがちであった身体的不器用さについて正確にアセスメントし、支援に結び付けることを期待する。